

## ジェンダー研究所彙報&lt;平成27年度&gt;

(平成27年4月1日～平成28年3月31日)

職名は発令時による

## 平成27(2015)年度研究プロジェクト概要

	年月日	テーマ	報告者、評者等
IGS セミナー	平成27年6月26日	第1回 公開講義「Women in Palestine (パレスティナの女性たち)」 【共催】 社会理論研究会 2015	【講師】 アリア・アサリ (アン・ナジャーフ大学 教育科学教員養成学部長) 【担当】 小玉亮子 (IGS 研究員/本学教授)
	平成27年7月31日	第2回/第6回「政党行動と政治制度」 セミナー 「Reserved for Whom?: The Electoral Impact of Gender Quo- tas in Taiwan (誰のための議席割り 当てなのか? 選挙における台湾のジェ ンダークオータの影響)」 【主催】 IGS、「政治代表におけるジェ ンダーと多様性」研究会 (GDRep)、科学研 究費助成事業基盤研究(C)「女性の政治参 画: 制度的・社会的要因のサーベイ分析」 (研究代表者: 三浦まり・上智大学教授)	【司会】 申琪榮 (IGS 准教授) 【講師】 黄長玲 (台湾・国立台湾大学副教授) 【討論】 スティール・若希 (東京大学准教授)、三 浦まり (上智大学教授)
	平成27年11月18日	第3回 キャサリン・ミルズ先生を迎 えて「Choice and Consent in Prenat- al Testing (出生前検査における選択 と同意)」	【司会/コーディネーター】 仙波由加里 (IGS 特 任リサーチフェロー) 【報告】 キャサリン・ミルズ (豪・モナシユ大学 准教授)、柘植あづみ (明治学院大学教授) 【討論】 マルセロ・デアウカンタラ (本学准教授)
	平成27年11月20日	第4回 「Thinking About Care: Be- fore, During, and Beyond An Era of Austerity? (ケアと財政緊縮政策— 以前・現在・以降)」	【講師】 スーザン・ヒメルヴァイト (英・オー ペン大学名誉教授) 【担当】 足立真理子 (IGS 教授) 【討論】 サイモン・モハン (英・ロンドン大学クイーン・ メアリー名誉教授)、伊藤誠 (東京大学名誉教授)
	平成27年11月27日	第5回 「『センシティブ』なテーマに かかわる面接調査と質問紙調査—セ クシュアリティあるいは自死の研究実 践をめぐる諸問題から」	【講師】 マリー・ピコーネ (IGS 特別招聘教授/仏・ 社会科学高等研究院准教授) 【担当】 棚橋訓 (IGS 研究員/本学教授)
	平成27年12月4日	第6回 「映画『何を怖れる』上映会」 (上野千鶴子大学院特別講義)	【講師】 上野千鶴子 (立命館大学特別招聘教授/ 東京大学名誉教授/本学客員教授) 【コーディネーター】 小川真理子 (本学リサー チフェロー)、鈴木亜矢子 (本学博士後期課程)
	平成27年12月16日	第7回 「いい兄貴・わるい弟—Gender Dynamics in An Early Modern Family (近世 の家族におけるジェンダーダイナミクス)」	【講師】 アン・ウォルソール (IGS 特別招聘教授 /米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授) 【担当】 石井クンツ昌子 (IGS 所長/本学教授)

お茶の水女子大学創立140周年記念国際シンポジウム	平成 27 年 10 月 12 日	<p>「女性のリーダーシップと政治参画—グローバルな視点から」</p> <p>【共催】 本学グローバルリーダーシップ研究所</p> <p>【協力】 科研費基盤研究 C「女性大統領と女性の政治的代表性」(研究代表者: 申琪榮・IGS 准教授)、政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRRep)</p>	<p>【総合司会/コーディネーター】 申琪榮 (IGS 准教授)</p> <p>【挨拶】 室伏きみ子 (本学大学長)、中川正春 (政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟会長/衆議院議員)、田中愛治 (早稲田大学政治経済学術院教授、世界政治学会理事長)</p> <p>【パネル司会】 足立真理子 (IGS 教授)、小林誠 (本学教授)</p> <p>【パネリスト】 モナ・リナ・クルック (米・ラトガース大学准教授)、スティール・若希 (東京大学准教授)、黄長玲 (台湾・国立台湾大学副教授)、スーザン・フランセスカ (加・カルガリー大学教授)、クレア・アネスリー (英・サセックス大学教授)、李珍玉 (韓国・西江大学社会科学研究所シニアリサーチフェロー)</p> <p>【ディスカッサント】 三浦まり (上智大学教授)、大山礼子 (駒澤大学教授)</p> <p>【閉会の辞】 猪崎弥生 (本学グローバル女性リーダー育成研究機構長、副学長)、こうだ邦子 (政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟事務局長/参議院議員)</p>
	平成 27 年 11 月 14 日	<p>「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか?—人類学の視座から改めて問う」</p> <p>【共催】 本学グローバルリーダーシップ研究所</p>	<p>【司会/コーディネーター】 棚橋訓 (IGS 研究員/本学教授)</p> <p>【報告】 マリー・ピコーネ (IGS 特別招聘教授/仏・フランス社会科学高等研究院准教授)、松岡悦子 (奈良女子大学教授)、加藤恵津子 (国際基督教大学教授)</p> <p>【討論】 新ヶ江 章友 (大阪市立大学准教授)、熊田 陽子 (日本学術振興会特別研究員 SPD)</p> <p>【開会の辞】 猪崎弥生 (本学グローバル女性リーダー育成研究機構長/本学副学長)</p> <p>【閉会の辞】 足立真理子 (IGS 教授)</p>
	平成 27 年 12 月 1 日	<p>「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働—社会的再生産はいかにして行われるのか?」</p> <p>【共催】 本学グローバルリーダーシップ研究所</p> <p>【後援】 大阪府立大学女性学研究センター</p>	<p>【総合司会/コーディネーター】 足立真理子 (IGS 教授)</p> <p>【開会挨拶】 猪崎弥生 (本学グローバル女性リーダー育成研究機構長/副学長)</p> <p>【報告】 スーザン・ヒメルヴァイト (英・オープン大学名誉教授)、上野千鶴子 (立命館大学特別招聘教授/東京大学名誉教授/本学客員教授)、定松文 (恵泉女学園大学教授)</p> <p>【ディスカッサント】 足立真理子 (IGS 教授)、伊田久美子 (大阪府立大学教授)</p> <p>【討論司会】 斎藤悦子 (IGS 研究員/本学准教授)</p> <p>【閉会の辞】 石井クンツ昌子 (IGS 所長/本学教授)</p>
院内集会	平成 27 年 7 月 30 日	<p>女性の政治参画を考える院内集会「台湾はなぜアジアで 2 番目に女性議員が多いのか?」</p> <p>【主催】 IGS、政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRRep)、科研費基盤研究 C「女性の政治参画: 制度的・社会的要因のサーベイ分析」(研究代表者: 三浦まり・上智大学教授)</p> <p>【後援】 政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟 (於: 参議院議員会館特別会議室)</p>	<p>【コーディネーター】 申琪榮 (IGS 准教授)、三浦まり (上智大学教授)</p> <p>【司会】 三浦まり (上智大学教授)</p> <p>【基調講演】 黄長玲 (国立台湾大学副教授)</p> <p>【討論】 申琪榮 (IGS 准教授)</p>

国際シンポジウム	平成 28 年 1 月 18 日	「科学と工学を目指す女性へ」 【共催】 本学グローバルリーダーシップ研究所	【司会／コーディネーター】アン・ウォルソール (IGS 特別招聘教授／米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授)、石井クンツ昌子 (IGS 所長／本学教授) 【報告】 キャロル・セロン (米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授) 【討論】 鷹野景子 (本学教授)、加藤美砂子 (本学教授)
公開シンポジウム	平成 27 年 10 月 25 日	日本学術会議公開シンポジウム「均等法は『白鳥』になれたのか——男女平等の戦後労働法制から展望する」 【主催】 日本学術会議社会学委員会・ジェンダー研究分科会 【共催】 フォーラム・「女性と労働 21」 【後援】 IGS、大阪府立大学女性学研究センター、NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN)、総合女性史研究会、働く女性の全国センター、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター、京都橘大学女性歴史文化研究所、城西国際大学ジェンダー・女性学研究所、一橋大学ジェンダー社会科学研究所 (CGraSS)、国際基督教大学ジェンダー研究センター (於：日本学術会議講堂)	【コーディネーター】 大沢真理 (日本学術会議連携会員／東京大学教授) 【開会挨拶】 遠藤薫 (日本学術会議第一部会員、ジェンダー研究分科会委員長／学習院大学教授) 【報告者】 上野千鶴子 (日本学術会議連携会員／立命館大学特別招聘教授／東京大学名誉教授／本学客員教授)、中野麻美 (弁護士／フォーラム・「女性と労働 21」 共同代表／派遣労働者ネットワーク理事長)、小林洋子 (厚生労働省雇用均等・児童家庭局雇用均等政策課長) 【コメントーター】 村尾祐美子 (東洋大学准教授)、松田康子 (情報労連、労働政策審議会雇用均等分科会前委員) 【総括コメント】 小宮山洋子 (小宮山洋子政策研究会／元厚生労働大臣)
大学院特別講義	平成 27 年 10 月 25 日 平成 27 年 10 月 28 日 平成 27 年 12 月 1 日 平成 27 年 12 月 3 日 平成 27 年 12 月 4 日 平成 28 年 1 月 27 日 平成 28 年 1 月 28 日	「特別講義 (博士前期／後期課程)」 (上野千鶴子大学院特別講義) (第 1 回) 公開シンポジウム「均等法は『白鳥』になれたのか」(第 2 回) 講義・討論 (1 コマ) (第 3 回) お茶の水女子大学創立 140 周年記念国際シンポジウム「『ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働——社会的再生産はいかにして行われるのか?」(第 4 回) 講義・討論 (1 コマ) (第 5 回) 第 6 回 IGS セミナー「映画『何を怖れる』上映会」と講義・討論 (1 コマ) (第 6 回) NHK・ETV 特集映像『日本人は戦後何を考えてきたのか男女平等を求めて』(90 分) 上映後、討論 (2 コマ) (第 7 回) 文献購読 [課題図書 上野千鶴子『女たちのサバイバル作戦』(文芸春秋 2013 年)]・討論 (3 コマ)	【講師】 上野千鶴子 (立命館大学特別招聘教授／東京大学名誉教授／本学客員教授) 【担当】 足立真理子 (IGS 教授) 【コーディネーター】 小川真理子 (本学リサーチフェロー)、鈴木亜矢子 (本学博士後期課程)

1. 人事関係

構成員

【所長】	<任期>
猪崎弥生（副学長〈学術情報・広報担当〉、グローバルリーダー育成研究機構長、附属図書館長、基幹研究院人文科学系教授）	2015（H27）年4月1日～ 2015（H27）年9月30日
石井クツ昌子（基幹研究院人間科学系教授）	2015（H27）年10月1日～ 2017（H29）年3月31日
【教員】	
足立真理子（ジェンダー研究所教授）	2015（H27）年4月1日～
申琪榮（ジェンダー研究所准教授）	2015（H27）年4月1日～
【研究員】	
小玉亮子（基幹研究院人間科学系教授）	2015（H27）年7月1日～ 2017（H29）年3月31日
棚橋訓（基幹研究院人間科学系教授）	2015（H27）年7月1日～ 2017（H29）年3月31日
斎藤悦子（基幹研究院人間科学系准教授）	2015（H27）年7月1日～ 2017（H29）年3月31日
【特別招聘教授】	
マリー・ピコーネ（仏・社会科学高等研究院准教授）	2015（H27）年10月1日～ 2015（H27）年11月30日
アン・ウォルソール（米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授）	2015（H27）年11月14日～ 2016（H28）年1月19日
【客員研究員】	
館かおる（本学名誉教授）	2015（H27）年4月1日～ 2016（H28）年3月31日
【研究協力】	
戒能民江（本学名誉教授）	2015（H27）年4月1日～ 2016（H28）年3月31日
【日本学術振興会外国人特別研究員】	
尹智炤（カンザス大学准教授）	2015（H27）年8月10日～ 2016（H28）年8月9日
【研究協力員】	
金井郁（埼玉大学准教授）	2015（H27）年4月1日～ 2016（H28）年3月31日
堀芳枝（恵泉女学園大学准教授）	2015（H27）年4月1日～ 2016（H28）年3月31日
【特任講師】	
板井広明	2015（H27）年11月1日～ 2016（H28）年3月31日
【特任リサーチフェロー】	
臺丸谷美幸	2015（H27）年8月1日～ 2016（H28）年3月31日

仙波由加里	2015（H27）年9月16日～ 2016（H28）年3月31日
吉原公美	2016（H28）年2月1日～ 2016（H28）年3月31日
【特任アソシエイトフェロー】	
吉原公美	2015（H27）年9月1日～ 2016（H28）年1月31日
【技術補佐員】	
板井広明	2015（H27）年4月1日～ 2015（H27）年10月31日
【アカデミック・アシスタント】	
梅田由紀子	2015（H27）年4月1日～ 2016（H28）年3月31日
滝美香	2015（H27）年6月16日～ 2016（H28）年3月31日
吉原公美	2015（H27）年4月1日～ 2015（H27）年8月31日

2. 研究調査活動

1) IGS 研究プロジェクト

『アジアにおける『新中間層』とジェンダー』研究

【研究担当】 足立真理子（IGS 教授）

【メンバー】

斎藤悦子（IGS 研究員／本学准教授）、金井郁（IGS 研究協力員／埼玉大学准教授）、堀芳枝（IGS 研究協力員／恵泉女学園大学准教授）、グレンダ・ロバーツ（早稲田大学教授）、スーザン・ヒメルヴァイト（英・オープン大学名誉教授）

【研究内容】

■ 概要

前年度終了した科研費基盤研究 A 「グローバル金融危機以降におけるアジアの新興／成熟経済社会とジェンダー」（研究代表者：足立真理子）の継続プロジェクト。

■ 研究内容・今年度の成果

1. 「グローバル金融危機以降のアジア経済社会の変容とジェンダー」の成果の中で、足立、金井・申、斎藤、長田論文を、『ジェンダー研究』2015 年度版に「特集：グローバル金融危機以降のアジア経済社会の変容とジェンダー」として掲載した。
2. 「グローバル金融危機以降のアジア経済社会の変容とジェンダー」の成果の中で、堀論文を JAFFE

e-journalにて公表・掲載が決定した。

3. 経済理論学会誌『季刊 経済理論』でのフェミニスト経済学特集号が提案されたこと、および「金融化とジェンダー」の出版計画のための準備作業を行った。
4. スーザン・ヒメルヴァイト（英・オープン大学名誉教授）、上野千鶴子（立命館大学特別招聘教授／東京大学名誉教授／本学客員教授）、定松文（恵泉女学園大学教授）を招聘し、足立真理子（総合司会、コメンテーター）、斎藤悦子（第2部司会）による国際シンポジウム『ジェンダーでみる新自由主義・政策・労働—社会的再生産はいかに行われるのか』を開催し、報告書を作成した。
5. スーザン・ヒメルヴァイト教授、サイモン・モハン教授（英・ロンドン大学クイーン・メアリー名誉教授）、伊藤誠教授（東京大学名誉教授）を迎えて、大学院特別セミナーを開催した。

#### 「社会的企業とジェンダー」研究

【研究担当】足立真理子（IGS 教授）

【メンバー】

斎藤悦子（IGS 研究員／本学准教授）、スーザン・ヒメルヴァイト（英・オープン大学名誉教授）、依田富子（米・ハーバード大学教授）

##### ■ 概要

近年、注目されている社会的企業とジェンダーの関係を、概念、政策課題、比較制度などの視点から分析していく。

##### ■ 研究内容・今年度の成果

社会的企業研究は定義および制度比較に重点をおいた。とくに、アメリカ・カリフォルニア州のコミュニティ・バンクの事例およびイギリス・ロンドンの社会的企業の事例における先行研究の分析をおこなった。ここから、社会的企業の成立や存続において、金融排除／包摂の視点が重要であることを確認し、従来明確ではなかった社会的企業の資金循環の側面に焦点をあてていくことになった。また、日本の事例研究として、政策金融が女性起業育成とどのような関わりをもっているかについて、東京・名古屋地区を中心として関係機関（自治体および

政策金融機関）にインタビュー調査をおこない、関係機関との連携研究の準備を開始した。

##### ■ 次年度への展望

今後、日本における事例研究を日本政策金融公庫研究所などと進めていく。

#### 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮（IGS 准教授）

【メンバー】政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（GDRRep）、尹智昭（日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授）、大木直子（本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【研究内容】

##### ■ 概要

東アジアは世界的に注目される経済発展を成し遂げた地域であるが、政治的民主主義の発展経路は統一ではない。とりわけ、女性の政治参画は、民主主義の歴史が長い日本において最も低い。他方で台湾は民主化以前から女性議員の割合が高く、民主化以降は3割をはるかに超えるようになった。韓国も、2000年代に入って十数年間女性議員が国会・地方議会において著しく増加した。本研究は、これら東アジア国々において女性の政治的代表的性を高める・妨害する要因は何か、ジェンダー・多様性を生かした政治制度はどのようにして可能になるのかという質問を立て、日本、韓国、台湾における男女議員への調査を実施し、比較分析することを目的とする。

##### ■ 研究内容・今年度の成果

海外専門家を招聘して研究会の実施、国際シンポジウムの開催、台湾ヘフィールドワーク、及び日本の国会議員を対象にするサーベイ実施のための質問表の作成・及び発送を行った。

1. 研究会の実施:「政党行動と政治制度」セミナーシリーズとして2015年度に第6回目（2015年7月）、第7回目（2015年11月）、第8回目（2016年2月）をGDRRep 主催で行った。
2. 台湾から専門家を招聘し、院内集会を行った（2015年7月30日）。
3. 6カ国から「ジェンダーと政治」分野の専門家を招聘し、

国際シンポジウム「女性のリーダーシップと政治参画：グローバルの視点から」を実施。

4. 台湾の総統選挙及び国政選挙に台北を訪問し、政党訪問・政治集会などに参加し、参与観察を行った。
5. サーベイ調査実施に向けてIDEAの質問表を検討し、日本調査に合わせて日本語質問表を作成した。
6. 日本の国会議員（男女）にサーベイ質問表の発送。

■ 次年度への展望

2016年度の主な研究計画は、日本の国会議員を対象として2015年度に行ったサーベイ調査の集計・分析である。サーベイ質問表は、列国議会連盟(IPU)のサーベイ調査表を日本の事情に合わせて修正したもの。女性議員のみならず男性議員にも同様の質問をしているのが独創的な点であり、男女、及び韓国、台湾との比較が可能になることから独自の調査結果が得られると期待できる。2016年度は韓国の研究者らの協力を得て韓国調査を実施する予定である。

【個人研究】 リベラル・フェミニズムの再検討

**【研究担当】** 板井広明 (IGS 特任講師)

**【研究内容】**

本研究プロジェクトの目的は、ウルストンクラフトやJ.S. ミルなど第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では特にJ.S. ミルの『女性の隷従』（女性の解放）のテキスト読解を通じて、そのことを明らかにするとともに、『女性の隷従』新訳を完成させ、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

19世紀後半における英国でのフェミニズムの思想と運動を考察する重要なテキストであるJ.S. ミル『女性の隷従』の翻訳作業にとりかかった。翻訳作業は神奈川大学非常勤講師の小沢佳史氏に協力してもらい、第1章の前半部分について、英文の構造をチェックし、当時のイングラ

ンド社会における女性の位置づけなどと照らし合わせながら、一文一文を丁寧に点検して、読みやすい翻訳文を目指し、ほぼ毎週翻訳検討会を開いた。

【個人研究】 朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題——ジェンダーとエスニシティの視点から

**【研究担当】** 臺丸谷美幸 (IGS 特任リサーチフェロー)

**【研究内容】**

本研究は朝鮮戦争(1950-1953)に参戦した日系アメリカ人をジェンダーとエスニシティの視点から考察するものである。本研究の最終目標は、朝鮮線戦争期の日系アメリカ人兵士を、第二次世界大戦期に起きた日系人強制立ち退き・収容政策から大戦後の冷戦開始に至るまでの歴史的文脈に位置付け、1940年代から1950年代の日系アメリカ人史を再考することにある。

今年度は、①二世男性による朝鮮戦争従軍と市民権問題、②朝鮮戦争期の日系人兵士の待遇の変化と公民権運動(Civil Rights Movement)の影響、③現代の日系二世退役軍人による日/米/朝鮮半島をめぐるトランスナショナルな記憶の形成を主な検討課題とした。成果として、米国ラ・サル大学主催の国際シンポジウムでの研究報告“Cultural Images of Japanese American Nisei Soldiers in the Korean War: Analysis from 1950s' Hollywood Films (「朝鮮戦争期における日系兵士の文化的イメージ——1950年代のハリウッド映画の分析から)」(11月8日)、大阪大学主催のアメリカ研究セミナーで研究報告“How Did 1950s Hollywood Films Represent Japanese American Soldiers on the Korean Battlefield? (「1950年代のハリウッド映画は朝鮮半島の戦場にいる日系人兵士をいかに描いたか)」(11月22日)を行った。また現在は、着任前の7月に日本移民学会年次大会で行った研究報告「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と市民権問題——自伝 *From Internment, to Korea, to Solitude* の分析を中心に」を基にした研究論文を執筆中である。次年度は、①カリフォルニア州での短期インタビュー調査の実施、②執筆中の論文の完成と単著本の執筆、③「冷戦とジェンダー」に関する研究会の実施を計画している。

〔個人研究〕 第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【研究内容】

近年、提供精子や提供卵子、代理母を利用して子どもを持つとする不妊カップルが増えている。そしてこうした医療によって生まれた人たちから、精子や卵子の提供者等を知りたいという声があがっている。しかし、こうした出生者へ、出生の経緯や提供者情報を伝えるかどうかという方針や姿勢は、その国や地域が、いかに多様な家族を受容する社会であるかということと無関係ではない。海外には多様な家族のあり方を受容する土台が確立し、同性カップルやシングルの人が生殖医療を利用して子どもを持つことがめづらしくない国や地域もある。そうしたところでは、出生者の出自を知る権利を保障しているところが少なくない。

そこで本研究は、諸外国の親子関係にかかわる法律やその社会における多様な家族のあり方に対する受容度と生殖医療で出生した人の出自を知る権利の関係性を分析し、出生者の福祉と社会における多様な家族形態の受容との関係性を明らかにすることを目的としている。

本年度はこれまで収集してきたオランダ、ドイツ、アイルランド、ベルギー、アメリカ (カリフォルニア州)、オーストラリア (ヴィクトリア州) に関する情報をもとに、特に親から告知を受けた出生者がどのような家族形態の中で育ってきたかなどを分析している。途中経過については、2015年11月8日(日)第4回日本医学哲学・倫理学会にて『AID 出生者のドナー情報アクセス権とドナーのプライバシー権の拮抗——ボランティア・レジストリーに期待される効果』というタイトルで報告した。

提供配偶子で生まれた人の中でも、同性カップルやシングル親から生まれた人は、より生物学的親やきょうだいに興味を持つ傾向があるという。次年度は、こうした同性カップルやシングルが提供配偶子を利用してつくる家族に焦点を当て、提供配偶子による出生者の出自を知る権利を求める動きについて、調査研究を行う予定である。また、可能であれば、このテーマに関して、セミナー

やシンポジウムを企画、実施してみたい。

〔個人研究〕 卵子提供を検討しているカップルへの情報提供に関する研究

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【研究内容】

本研究は城西国際大学の清水清美教授が中心となっており、行ってきた研究プロジェクトの一環としてすすめてきた研究であり、不妊カップルが自身や生まれてくる子どもの身体的・精神的・社会的リスクを理解し、その後の親子関係や家族形成への影響も含めて、卵子提供の実施の有無を含めて熟慮できるような情報の提示を目指してすすめてきた。本研究は3ヵ年(平成24-26年度)で、すでに調査は終了しているが、現在提供資料集および記録集を作成中で、2016年3月に刊行される予定。

本プロジェクトでは①日本国内の卵子提供をめぐる動きを把握する、② Medline 等を活用し、卵子提供に関する学術ジャーナルを精査し、卵子提供をめぐる動向を把握する、③国内外の一般の新聞記事やメディア報道などを中心に、卵子提供をめぐる世界の動きを把握する、の3本立てで調査研究をすすめてきた。仙波は中でも、③を担当し、世界で起こっている卵子提供をめぐる問題や現象について調査した。

調査方法は、2005年11月から2014年7月31日にかけて、カナダに拠点を置くインファティリティ・ネットワークから配信された生殖医療や不妊治療に関連する情報、および、2009年5月から2014年7月31日にかけてバイオエッジ (BioEdge) から配信されてきたニュースや情報の中から、卵子提供に関連する内容を拾いあげ、計196本の新聞記事を分析の対象とした。それらをカテゴリー別に分類し、特にとりあげられている件数の多い「卵子提供者に対する金銭の提供」「卵子提供者のリスク」「どのような女性たちが卵子提供者になっているか」「卵子提供を利用した高齢出産」といったカテゴリーについて、卵子提供の問題と関連づけながら分析した。

来年度は、社会的理由による卵子凍結保存の問題について調査研究を行い、一般社会に向けて、その現実と問題性を発信していきたい。

## 2) 外部資金による研究プロジェクト

「女性大統領と女性の政治的代表性——韓国の朴槿恵を中心に」

〈科学研究費基盤研究 C:平成 26(2014)-平成 29(2017)年度〉

【研究担当】 申琪榮 (研究代表者・IGS 准教授)

### 【研究内容】

#### ■ 概要

韓国では 2012 年の選挙で保守政党の女性大統領 (朴槿恵) が誕生した。保守政権は伝統的なジェンダー規範を支持し、政治における女性の実質的な代表性 (women's substantial representation) を損ないかねないと指摘されてきたが、朴槿恵は「女性」を選挙のキーワードにして戦い、当選した。本研究は、朴槿恵大統領の在任期間を研究期間とし、朴政権の女性関連政策、政治制度、及び国政選挙 (2016 年) における政党の選挙戦略の変化を考察することで、保守政権の女性大統領が女性の実質的な政治的代表性にどのような影響を及ぼしているのかを考察する。

#### ■ 研究内容と今年度の成果

1. 学会発表: ECPG (European Conference on Politics and Gender) (スウェーデン・ウプサラ大学) で「韓国の地方議会における政党と女性の代表性」について研究発表を行った (Dr. Jiso Yoon と共著)。
2. 韓国から専門家を招聘し、国際シンポジウム「女性のリーダーシップと政治参画: グローバルの視点から」で「朴槿恵大統領の女性代表性」について報告してもらった (2015 年 10 月 12 日、お茶の水女子大学)。
3. 10 月からソウルにて在外研究を始め、フィールドワークを実施。朴槿恵政権のジェンダー政策 (特に慰安婦問題関連) について資料収集、ソウル大学日本研究所・済州平和研究院にて研究発表。

#### ■ 次年度以降の展望

2016 年度前期は、ソウル及びアメリカで在外研究を継続し、資料収集・分析を続ける一方で、研究成果のまとめにも取り掛かる。とりわけ、4 月に予定されている第 20 回国政選挙の参与観察を通じて朴政権がどのように評価されるのかを観察する。また、6 月に Association for Asian Studies (京都)、7 月には International Political

Science Association (イスタンブール) にて報告を予定している。学会発表した論文は、英語雑誌に投稿する準備を進める。

科学研究費基盤研究 C「女性の政治参画——制度的・社会的要因のサーベイ分析」

〈科学研究費基盤研究 C:平成 26(2014)-平成 29(2017)年度〉

【研究担当】 申琪榮 (研究分担者・IGS 准教授)、三浦まり (研究代表者・上智大学教授)

#### ■ 概要

政治代表における男女不均衡 (女性の過少代表/男性の過大代表) はなぜ引き起こされ、どのように再生産されてきたのかを明らかにすることを目的とする。女性の政治参画を規定する制度的社会的要因を解明し、どのような制度改革と規範形成が過少代表の解消につながるかを明らかにするため、日本・韓国・台湾・ニュージーランドを比較分析する。

#### ■ 研究内容と今年度の成果

2015 年度は専門家をお呼びした研究会の実施、台湾へフィールドワーク、及び日本の国会議員を対象にするサーベイ実施のための質問表の作成に取り組んだ。

1. 研究会の実施: 2014 年からスタートした「政党行動と政治制度」セミナーシリーズを今年も続けて 3 回行った [第 6 回目 (2015 年 7 月)、第 7 回目 (2015 年 11 月)、第 8 回目 (2016 年 2 月)]。
2. 台湾から専門家を招聘し、院内集会及び研究会を行った (2015 年 7 月 30 日)。
3. 台湾の総統選挙及び国政選挙に台北を訪問し、政党訪問・政治集会などに参加し、参与観察を行った。
4. サーベイ調査実施に向けて IDEA の質問表を検討し、日本調査に合わせて日本語質問表を作成した。
5. サーベイ質問表の発送・集計。

#### ■ 次年度以降の展望

2016 年度は、2015 年度に行った日本の国会議員に対するアンケート調査を回収し、回答のコーディングや分析を行う。東アジアの他国との比較のために、さらに仮説を練り直し、調査表を修正する。後期には韓国の国会議員について修正されたアンケート調査を行う予定である。



2015年に引き続き、政党行動と政治制度について専門家をお呼びしてセミナーを続ける。ジェンダー研究所との共催セミナーも開催予定である。

「日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究」

〈学術振興会特別研究員奨励費：平成27(2015)年8月-平成28(2016)年8月〉

【研究担当】申琪榮(研究代表者・IGS准教授)、尹智炤(研究分担者・日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授)

【研究内容】

■ 概要

日本は先進国のひとつとなるまでに発展したが、国会議員の女性比率は依然として低いままである。とはいえ、地方政治における女性の代表性は比較的高い。本プロジェクトでは、東京都議会を例に、女性の政治参加をうながす戦略を検証し、それらの戦略がどのような影響を及ぼしたのかについて分析する。

■ 研究内容と今年度の成果

2015年度には日本の地方選挙と女性の政治参加に関する先行研究を検討することを主な活動とした。そして、2000年代以来東京都議会の会議録(本会議・委員会)を検討し、女性の利益に関する政策トピックは何か、誰が(議員性別・政党)このような政策トピックに言及するのかに関するデータを集めた。これまで集められたデータは議員の性別と所属政党が地方議会で議論される政策アジェンダに影響を与えることを示している。

■ 次年度以降の展望

次年度は日韓の女性の政治代表の比較研究を行う。ソウル市議会と東京都議会を中心として地方議会でどのように女性の利益が代表されるのかを分析する。変数としてはフォーマルとインフォーマルな制度(選挙制度、クォータ制度、政党内部的・外部的関係)に注目する。

2016年には次のようなスケジュールの通りに学会で研究論文を発表する予定がある(Association for Asian Studies Asia, 京都(日本)2016年6月24-27日、International Political Science Association Meeting, イスタンブール(トルコ)、2016年7月23-28日)。学会参加の際、パネリスト

からコメントをもらい、指摘を反映して論文を書き直し、国際ジャーナルに投稿することを目指している。

“The Role of Political Parties in Promoting Women's Political Representation in Local Legislatures in Korea”

〈Academy of Korean Studies：平成26(2014)年6月1日-平成27(2015)年8月31日〉

【研究担当】尹智炤(研究代表者・日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授)、申琪榮(研究分担者・IGS准教授)

【研究内容】

アジアは世界的に他の地域に比べて女性の政治的代表性が遅れている。韓国はアジアの中でクォータ制度が比較的早く議論され、2000年には国会と地方議会選挙でクォータが導入された。にもかかわらず、今までクォータの成果には限界があった。しかも、地方レベルでは選挙制度に関わる改革が論じられており(例：政党の候補者指名の禁止)、制度変化が生じた場合はクォータが廃止される可能性もある。本研究は2000年代以来の地方選挙データを通じて、クォータの導入の結果地方議会で女性議員の割合が増加したと指摘する。一方、クォータに対して政党のインフォーマルな抵抗があった。そして、クォータ制度の維持に消極的な有権者と政治家の無関心の問題もあった。本研究はクォータ制度の定着化にどのようなチャレンジがあるのかを議論する。今年度の研究成果としては韓国の地方政治・女性と地方政治に関わる先行研究の検討、地方選挙結果のデータの収集、研究論文の作成、論文結果の学会発表などがある。なお、2015年度には次のように、学会で研究成果の報告をした(European Consortium for Political Research, 2015年6月11-13日)。パネリストからコメントをもらい、指摘を反映して論文を書き直し、現在論文は国際ジャーナルの投稿審査中である。次年度では国際ジャーナルに投稿することを目指している。

「食の倫理と功利主義——食をめぐる規範・実践・ジェンダー」

〈科学研究費基盤研究C：平成26(2014)年度-平成28(2016)

年度)

【研究担当】板井広明(研究代表者)

【研究内容】

本研究プロジェクトの目的は、功利主義的な食の倫理の研究の視点から昨今の食の倫理論を整理し、あるべき食の倫理の提示を行なうことにある。研究は2本立てで、第1は18世紀英国における人間と動物の区別・位置づけという思想史的考察を行なう。とくにベンサムを中心とした18世紀英国の動物論の検討では公刊テキストの検討である。第2は第1の研究を参照しつつ、英米日の新たな食のネットワーク作りや運動の実態と特徴を比較しつつ、食と農、食と環境、ジェンダーの問題から規範的な食の倫理を検討し、現代のグローバルな経済社会における望ましい食の倫理を提案する。

今年度は夏にイギリスでの資料調査、11月にワルシャワ大学で開かれた第9回日本学国際学会で、日本における肉食の状況と倫理について報告した(報告原稿は、当国際学会編の英文論集に所収予定である)。

次年度は、日本各地での食と農に関するさまざまな実践活動の取材も行ないつつ、前年度までの研究成果を、動物と人間との関わりおよび現代生活における食の倫理の実践のあり方をめぐる学術的啓蒙書としてまとめたい。

「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験——ジェンダーとエスニシティの視点から」

〈竹村和子フェミニズム基金：平成27(2015)年7月-平成28(2016)年6月〉

【研究担当】臺丸谷美幸(個人研究・IGS特任リサーチフェロー)

【研究内容】

日系アメリカ人史において、朝鮮戦争へ従軍した日系二世を扱った研究は、ほぼ存在しない。だが朝鮮戦争期は、冷戦を背景に、米軍でジェンダーとエスニシティを軸とした大幅な軍備再編・人員編成が行われた時期として重要である。本研究は朝鮮戦争へ志願した日系二世の女性(二世女性)に着目し、1950年代における二世女性の社会進出と従軍経験との関係について検討することにある。今年度は第一に、二世女性による朝鮮戦争従軍経験と

「再定住」問題について検討を行った。成果としては、杉田米行大阪大学教授編集による共著本 *Toward a More Amicable Asia-Pacific Region: Japan's Roles* (『より友好的アジア環太平洋地域を目指して——日本の役割』) の執筆に参加し、第二章“Experiences of Japanese American Soldiers in the Korean War: Analyzing the Case of a Nisei Woman's Military Service and Resettlement (『朝鮮戦争における日系アメリカ人兵士の経験——二世女性の従軍と再定住の事例分析から』)”を担当した。第二に、1950年代エスニック・メディアにおける二世女性兵士の評価についての調査を行い、新聞等の記事分析を進めると共に、11月には、米・ヴァージニア州に所在する米国女性従軍者記念館にて博物館調査、資料収集を実施した。第三に、二世女性の事例との比較対象として二世男性の事例にも着目しており、自伝や過去に報告者が行ったインタビュー調査を基に検討している。さらに来年度は、カリフォルニア州内で二世女性と二世男性の退役軍人を対象とした短期のインタビュー調査を計画しており、男女間での従軍経験や従軍が祖国帰還後の社会生活に与えた影響について比較検討を行う予定である。加えて来年度は日系人以外のアジア系アメリカ人女性の志願状況についても調査範囲を広げ、1950年代の映画表象や新聞記事を調査・分析を行いたい。

「諸外国の生殖補助医療における法規制の時代的変遷に関する研究」

〈厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業：平成27(2015)年9月-平成28(2016)年3月〉

【研究担当】仙波由加里(研究分担者・IGS特任リサーチフェロー)、日比野由利(研究代表者・金沢大学)、石原理(埼玉医科大学) 森和子(文京学院大学)、木村敦子(京都大学)、小門穂(大阪大学)、梅沢彩(熊本大学)、宇田川妙子(民博総合研究大学院大学)

【研究内容】

妊娠の高年齢化、生殖補助医療技術の発達により不妊治療は急速に多様化している。我が国においても、生殖補助医療に関する法律案の提出に向けた準備が進められているが、夫婦間あるいは第三者を介した生殖補助医療に

ついて、運用状況・管理体制など未解決な点も多い。そこで本プロジェクトでは、諸外国（フィンランド、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダ）における、不妊治療の実態を調査し、生殖補助医療にかかる法律の有無とその内容を、文献調査や現地調査を経て明らかにする。本プロジェクトの研究代表者は金沢大学の日比野由利であるが、仙波は北米を担当し、2016年2月1日から2月8日まで米国現地にて、関係者へのインタビューを通し情報収集を行った。主な調査事項は、アメリカ・カナダの生殖医療の現状と、これに関する法制度等の把握である。北米では近年DNA検査の普及が著しく、DNA検査によって意図せず提供配偶子で出生した人が生物学的親やきょうだいを知る機会が増えてきている。現地ではその現状も探った。この調査結果は報告書としてまとめ、2016年3月末に刊行される。

### 3) 海外招聘研究者によるプロジェクト

Mizuko Kuyō in Japan from 1980 to the Present: A Comparative Perspective

【研究担当】 マリー・ピコーネ (Mary PICONE・IGS 特別招聘教授／仏・フランス社会科学高等研究院准教授)

【研究内容】

平成 27 年 10 月 1 日 -11 月 30 日の在任中、下記の研究活動を実施した。

① 2015 年 10 月 19-28 日、京都を中心とする関西地域寺社を訪問し、日本の佛教における死生観や水子供養についての調査を実施した。

10 月 20 日 円福寺 (京都府八幡市)：万人講一般公開

10 月 21 日 浄福寺 (京都市左京区)：地獄絵開帳

10 月 22 日 仁和寺 (京都市右京区)：水子供養

10 月 23 日 高台寺 (京都市東山区)：地獄絵、秋の夜間特別拝観

10 月 24 日 化野念仏寺 (京都市右京区)：月例の水子供養

10 月 25 日 一乗寺 (兵庫県加西市)：地獄絵、賽の河原、水子供養、加西動物霊園 (兵庫県加西市)

10 月 26 日 西福寺 (京都市東山区)：水子供養、地獄絵

10 月 27 日 長岳寺 (奈良県天理市)：地獄絵解き

10 月 28 日 念仏寺 (京都市右京区)

② 10 月 29 日 杏林大学医学部解剖学教室の松村譲児教授への献体慰霊祭に関するインタビュー調査を実施した。

③ 11 月 14 日 お茶の水女子大学設立 140 周年記念国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？——人類学の視座から改めて問う」における研究報告「胎児の死と中絶をめぐるジェンダー化の様相——ヨーロッパの実践的変容と日本の水子供養の対比的考察から」を担当。

④ 11 月 27 日、第 5 回 IGS セミナーにて講義。演題「『センシティブ』なテーマにかかわる面接調査と質問紙調査——セクシュアリティあるいは自死の研究実践をめぐる諸問題から」。

Faith, Politics, and Affection: A Social History of the Hirata Atsutane Family

【研究担当】 アン・ウォルソール (Anne WALTHALL・IGS 特別招聘教授／米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授)

【研究内容】

Drawing on the vast archive of family documents that the Hirata Shrine donated to the National Museum of Japanese History in 2002, my research focuses on the individual concerns, family dynamics, and political relationships of a family best known for its contribution to the discourse on national identity. The outline of my research is as follows:

Part I: The Romance of Hirata Atsutane (1776-1843)

Chapter 1: How many ways can a life story be told?

Chapter 2: Material objects that express belief: paintings, stone whistle, a doll.

Chapter 3: Exile as seen through Orise's letters and diary. Interlude: Kanetane as proselytizer and book publisher.

Part II: Atsutane's grandsons in the Meiji Restoration.

Chapter 4: The Hirata family's relations with Akita domain.

Chapter 5: Sainted oldest brother; stubborn younger

brother: gender relationships within the household.

Chapter 6: Nobutane's writings for a new Japan.

Part III: The Hirata family in Modern Japan.

Chapter 7: Kanetane: from teacher to shrine priest.

Chapter 8: Moritane: adopted head to a diminished school.

While affiliated with the Institute of Gender Studies at Ochanomizu University, I attended three monthly meetings of the "Hirata kokugaku kenkyūkai" held at the Hirata shrine at Yoyogi. There I obtained valuable documents, especially letters written by Kanetane, and received help reading letters written to Kanetane and Nobutane. Much of my time was spent trying to read letters written in *kuzushiji* and translating them. I also spent several days at the Tokyo Central Library examining accounts of the Boshin war of 1868 for references to spear fighting for a paper I am planning on this subject (Kaneya was addicted to spear fighting).

The outcome of my research was 1) a paper on Orise's letters from when she accompanied Atsutane when the shogunate exiled him to Akita. While he lectured to domain retainers and tried to get a paid position in the domain bureaucracy, Orise managed correspondence with the rest of the family left behind in Edo. Although scholars have tended to see her as nothing but Atsutane's amanuensis, her multifaceted letters reveal a complex web of relationships that supported the activities of both husband and wife. 2) A revision of an essay I had originally written on the relations between Nobutane and Kaneya based on the talks I gave at graduate seminars at Ochanomizu University.

### 3. 研究交流・社会連携部門

平成27年4月から平成28年3月の間の活動は次の通りである。

#### 1) IGS セミナー

①第1回 公開講義「Women in Palestine (パレスティナの女性たち)」

【共催】社会理論研究会 2015

6月26日に開催された。小玉亮子氏(IGS 研究員/本学教授)が担当する、大学院開講科目「ジェンダー理論文化」の授業の一貫として、アリア・アサリ氏(アン＝ナジャーフ大学教育科学教員養成学部長)を講師に迎え、「Women in Palestine」と題する公開講義が行われた。

②第2回/第6回「政党行動と政治制度」セミナー「Reserved for Whom? : The Electoral Impact of Gender Quotas in Taiwan (誰のための議席割り当てなのか? 選挙における台湾のジェンダー・クオータの影響)」

【主催】IGS、「政治代表におけるジェンダーと多様性」研究会(GDRep)、科学研究費助成事業基盤研究(C)「女性の政治参画:制度的・社会的要因のサーベイ分析」

7月31日に開催された。司会は申琪榮氏(IGS 准教授)が務め、講師の黄長玲氏(台湾・国立台湾大学副教授)から「Reserved for Whom? : The Electoral Impact of Gender Quotas in Taiwan」と題する報告が行われた。討論はスティール・若希氏(東京大学准教授)と三浦まり氏(上智大学教授)が務めた。

③第3回 キャサリン・ミルズ先生を迎えて「Choice and Consent in Prenatal Testing (出生前検査における選択と同意)」

11月18日に開催された。司会とコーディネーターは、仙波由加里氏(IGS 特任リサーチフェロー)が務めた。セミナーではキャサリン・ミルズ氏(豪・モナシュ大学准教授)、柘植あづみ氏(明治学院大学教授)を迎え、ミルズ氏からは「Choice and Consent in Prenatal Testing in Australia (オーストラリアにおける出生前検査における選択と同意)」、柘植氏からは「What Do Women Want to Choose in Prenatal Testing in Japan? (日本では女

性が出生前検査を選択したいとき何が起きるか」と題する報告がなされた。討論はマルセロ・デ・アウカンタラ氏（本学准教授）が務めた。

④ 第4回 「Thinking About Care: Before, During, and Beyond An Era of Austerity? (ケアと財政緊縮政策——以前・現在・以降)」

11月20日に開催された。足立真理子氏（IGS教授）がコーディネーターを務め、スーザン・ヒメルヴァイト氏（英・オープン大学名誉教授）を講師に迎えて“Thinking About Care: Before, During, and Beyond An Era of Austerity?”と題する講義が行われた。コメンテーターは、サイモン・モハン氏（英・ロンドン大学クイーン・メアリー名誉教授）、伊藤誠氏（東京大学名誉教授）が務めた。

⑤ 第5回 「Interviews and Questionnaires on ‘Sensitive’ Subjects: problems in the investigation of sexuality or of suicide (『センシティブ』なテーマにかかわる面接調査と質問紙調査——セクシュアリティあるいは自死の研究実践をめぐる諸問題から)」

11月27日に開催された。棚橋訓氏（IGS研究員／本学教授）がコーディネーターを務め、マリー・ピコーネ氏（IGS特別招聘教授／仏・フランス社会科学高等研究院）を講師に迎えて“Interviews and Questionnaires on ‘Sensitive’ Subjects: problems in the investigation of sexuality or of suicide”と題する講義が行われた。

⑥ 第6回 「映画『何を怖れる』上映会」（上野千鶴子大学院特別講義）

12月4日、ドキュメンタリー映画『何を怖れる』の上映会を行った。上映会後は、上野千鶴子氏（立命館大学特別招聘教授／東京大学名誉教授／本学客員教授）のトークとフロアとの質疑応答の時間が設けられた。司会とコーディネーターは小川真理子氏（本学リサーチフェロー）が務めた。

⑦ 第7回 「いい兄貴・わるい弟——Gender Dynamics in An Early Modern Family (近世の家族におけるジェン

ダーダイナミックス)」

12月16日に開催された。石井クンツ昌子氏（IGS 所長／本学教授）がコーディネーターを務め、アン・ウォルソール氏（IGS 特別招聘教授／米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授）を講師に迎えて「いい兄貴・わるい弟——Gender Dynamics in An Early Modern Family」と題する講義が行われた。

2) お茶の水女子大学創立140周年記念国際シンポジウム

① 「女性のリーダーシップと政治参画——グローバルな視点から」

【共催】 本学グローバルリーダーシップ研究所

【協力】 科研費基盤研究C「女性大統領と女性の政治的代表性」（研究代表者・申琪榮・IGS 准教授）、政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（GDRRep）

10月12日に、お茶の水女子大学創立140周年記念国際シンポジウム「女性のリーダーシップと政治参画——グローバルな視点から～」が開催された。総合司会は申琪榮氏（IGS 准教授）が務めた。シンポジウムでは初めに、室伏さきみ子氏（本学大学長）、田中愛治氏（世界政治学会理事長／早稲田大学教授）、中川正春氏（「政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟」、通称「クオータ議連」会長／衆議院議員）からそれぞれ開会の挨拶があった。

第一部「世界におけるクオータの潮流」では、小林誠氏（本学教授）が司会を務め、モナ・リナ・クルック氏（米・ラトガース大学准教授）から「政治分野におけるジェンダー・クオータの現実と神話」、ステイール・若希氏（東京大学准教授）から「世界における女性の政治的エンパワーメントの支援措置と戦略」、黄長玲氏（台湾・国立台湾大学副教授）から「クオータ制で当選した台湾の女性議員の実績」と題する報告が行われた。ディスカッションは三浦まり氏（上智大学教授）が務めた。第二部「政治リーダーシップと女性閣僚」では、足立真理子氏（IGS 教授）が司会を務め、スーザン・フランセスカ氏（加・カルガリー大学教授）から「女性が代表するものは何か——ジェンダーと閣僚任命」、クレア・アネスリー氏（英・サセックス大学教授）から「女性閣僚を増やす方法とそ

の重要性」、李珍玉氏（韓国・西江大学社会科学研究所シニアリサーチフェロー）から「韓国初の女性大統領の象徴的代表性」と題する報告が行われた。ディスカッサントは大山礼子氏（駒澤大学教授）が務めた。閉会の辞は、猪崎弥生氏（本学グローバル女性リーダー育成研究機構長／本学副学長）とこうだ邦子（「クオータ議連」事務局長／参議院議員）が務めた。

②「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？——人類学の視座から改めて問う」

【共催】本学グローバルリーダーシップ研究所

11月14日、お茶の水女子大学設立140周年記念国際シンポジウム「はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか——人類学の視座から改めて問う」が開催された。シンポジウムでは、棚橋訓氏（本学教授）が司会を務めた。開会の辞は猪崎弥生氏（本学グローバル女性リーダー育成研究機構長／本学副学長）が務めた。シンポジウムでは、マリー・ピコーネ氏（IGS特別招聘教授／仏・フランス社会科学高等研究院）から「胎児の死と中絶をめぐるジェンダー化の諸相——ヨーロッパの実践的変容と日本の水子供養の対比的考察から」、松岡悦子氏（奈良女子大学教授）から「ジェンダーなのか文化なのか——文化人類学にとっての難問」、加藤恵津子氏（国際基督教大学教授）から「〈男〉〈女〉〈その他：\_\_\_\_\_〉——ポストコロニアルな日本をジェンダー・カテゴリー化する」と題する報告が行われた。ディスカッサントは新ヶ江章友氏（大阪市立大学准教授）と熊田陽子氏（日本学術振興会SPD）が務めた。閉会の辞は足立真理子氏（IGS教授）が務めた。

③「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働 社会的再生はいかに行われるのか？」

【共催】本学グローバルリーダーシップ研究所

【後援】大阪府立大学女性学研究センター

12月1日、お茶の水女子大学設立140周年記念国際シンポジウム「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働 社会的再生はいかに行われるのか？」が開催された。総司会とコーディネーターは足立真理子氏（IGS教授）

が務め、開会の辞は猪崎弥生氏（本学グローバル女性リーダー育成研究機構長／本学副学長）が務めた。スーザン・ヒメルヴァイト氏（英・オープン大学名誉教授）は「新自由主義化における危機と社会的再生の規範の変容」という題目で報告した。上野千鶴子氏（立命館大学特別招聘教授／東京大学名誉教授／本学客員教授）は「新自由主義とジェンダー——日本の経験」という題目で報告した。定松文氏（恵泉女学園大学教授）は「仕事創出と女性間格差」という題目で報告した。

討論の部では、斎藤悦子氏（本学准教授）司会を務めた。討論は足立氏、伊田久美子氏（大阪府立大学教授）が務めた。閉会の辞は石井クンツ昌子氏（IGS所長／本学教授）が務めた。

### 3) 院内集会

〈女性の政治参画を考える院内集会〉「台湾はなぜアジアで2番目に女性議員が多いのか？——議席割り当てと候補者クオータ」

【主催】IGS、「政治代表におけるジェンダーと多様性」研究会（GDRRep）、科学研究費助成事業基盤研究（C）「女性の政治参画：制度的・社会的要因のサーベイ分析」（研究代表者・三浦まり・上智大学教授）

【後援】政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟

7月30日に参議院議員会館特別会議室において、〈女性の政治参画を考える院内集会〉が開催された。司会は三浦まり氏（上智大学教授）が務め、基調講演に黄長玲氏（国立台湾大学副教授）を迎えた。黄氏からは「台湾はなぜアジアで2番目に女性議員が多いのか？——議席割り当てと候補者クオータ」と題する講演が行われた。講演終了後に申琪榮氏（IGS准教授）からのコメントとフロアとの質疑応答、「政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟」（通称「クオータ議連」）を代表して中川正春氏（クオータ議連会長／衆議院議員）からの発言があった。

#### 4) 国際シンポジウム「科学と工学を目指す女性へ (Women in Science and Engineering)」

【共催】 本学グローバルリーダーシップ研究所

平成 28 年 1 月 17 日に、国際シンポジウム「科学と工学を目指す女性へ」が開催された。石井クンツ昌子氏 (IGS 所長/本学教授) とアン・ウォルソール氏 (IGS 特別招聘教授/米・カリフォルニア大学アーバイン校名誉教授) が司会とコーディネーターを務めた。開会・閉会の辞は石井クンツ氏が担当した。基調講演にキャロル・セロン氏 (米・カリフォルニア大学アーバイン校教授) を迎え「『固執は文化：職業的ソーシャライゼーションと性差別の再生産 (Persistence is Cultural: Professional Socialization and the Reproduction of Sex Segregation)』」と題する講演が行われた。さらにパネリストとしては加藤美砂子氏 (本学教授) と鷹野景子氏 (本学教授) が登壇し、加藤氏からは「理系学会における女性比率」、鷹野氏からは「進路選択における母親の意識の影響に関する調査研究の紹介」と題する報告がそれぞれ行われた。討論の部ではウォルソール氏が司会を務めた。また同日は、本シンポジウムに先立ちインフォーマル・セッション「セロン先生を囲んで大いに語ろう」と題する、学部・大学院生とセロン先生との対話の時間も設けられた。

#### 5) 公開シンポジウム

日本学術会議公開シンポジウム「均等法は『白鳥』になれたのか——男女平等の戦後労働法制から展望する」

【主催】 日本学術会議社会学委員会・ジェンダー研究分科会

【共催】 フォーラム・「女性と労働 21」

【後援】 IGS、大阪府立大学女性学研究センター、NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN)、総合女性史研究会、働く女性の全国センター、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター、京都橘大学女性歴史文化研究所、城西国際大学ジェンダー・女性学研究センター、一橋大学ジェンダー社会科学研究センター (CGraSS)、国際基督教大学ジェンダー研究センター (於：日本学術会議講堂)

【コーディネーター】 大沢真理 (日本学術会議連携会員/

東京大学教授)

【開会挨拶】 遠藤薫 (日本学術会議第一部会員、ジェンダー研究分科会委員長/学習院大学教授)

【報告者】 上野千鶴子 (日本学術会議連携会員/立命館大学特別招聘教授/東京大学名誉教授/本学客員教授)、中野麻美 (弁護士/フォーラム・「女性と労働 21」共同代表/派遣労働者ネットワーク理事長)、小林洋子 (厚生労働省雇用均等・児童家庭局雇用均等政策課長)

【コメンテーター】 村尾祐美子 (東洋大学准教授)、松田康子 (情報労連、労働政策審議会雇用均等分科会前委員)

【総括コメント】 小宮山洋子 (小宮山洋子政策研究会/元厚生労働大臣)

#### 6) 大学院特別講義

(日時) 平成 27 年 10 月 25 日、10 月 28 日、12 月 1 日、12 月 3 日、12 月 4 日、平成 28 年 1 月 27 日、1 月 28 日  
博士前期課程および後期課程の開講科目として上野千鶴子大学院特別講義が実施された (科目名「特別講義」) 授業担当は足立真理子氏 (IGS 教授) が務め、講師に上野千鶴子氏 (立命館大学特別招聘教授/東京大学名誉教授/本学客員教授) を迎えた。小川真理子氏 (本学リサーチフェロー)、鈴木亜矢子氏 (本学博士後期課程) が授業コーディネーターを務めた。詳細は以下の通り。(第 1 回) 公開シンポジウム「均等法は『白鳥』になれたのか」、(第 2 回) 講義・討論 (1 コマ)、(第 3 回) お茶の水女子大学創立 140 周年記念国際シンポジウム「『ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働——社会的再生産はいかにして行われるのか?』」、(第 4 回) 講義・討論 (1 コマ)、(第 5 回) 第 6 回 IGS セミナー「映画『何を怖れる』上映会」と講義・討論 (1 コマ)、(第 6 回) NHK・ETV 特集映像『日本人は戦後何を考えてきたのか男女平等を求めて』(90 分) 上映後、討論 (2 コマ)、(第 7 回) 文献講読 [課題図書 上野千鶴子『わたしのサバイバル作戦』(文芸春秋 2013 年)]・討論 (3 コマ)。

#### 4. 関連研究会

① 「フェミニスト経済学」研究会

【コーディネーター】 足立真理子 (IGS 教授)、伊田久美

子（大阪府立大学教授）

②政治代表におけるジェンダーと多様性研究（GDRep）

【コーディネーター】申琪榮（IGS 准教授）

【メンバー】三浦まり（上智大学教授）、スティール・若希（東京大学准教授）

## 5. アジア工科大学院大学（AIT）との国際連携プロジェクト

平成 13（2001）年度より継続する本学とアジア工科大学院大学（AIT）との大学間学術交流協定に基づく「ジェンダーと開発」領域における大学院生の交換研修プログラムである。本学博士前期課程「フィールドワーク方法論」と「国際社会ジェンダー論」との協働プログラムであり、AIT からの院生受け入れは 5 月、本学の院生派遣は 8 月に実施した。今年度のテーマは「Labor, Sexuality and Empowerment」であり、11 月 30 日に本学院生参加者による報告会を開いた。

【担当】足立真理子（IGS 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、日下部京子（AIT 准教授）、大橋史恵（武蔵大学准教授）、板井広明（IGS 特任講師）、張璋容（本学博士後期課程）、吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー）

## 6. 教育・研修部門

### 1) 学部出講・大学院担当

〈人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻〉

足立真理子

ジェンダー政治経済学（前期）

ジェンダー政治経済学演習（後期）

フェミニスト経済学（前期）

フェミニスト経済学演習（後期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）

申琪榮

比較政治論（前期）

比較政治論演習（通年不定期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）

〈人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻〉

足立真理子

ジェンダー基礎論（前期）

ジェンダー社会経済学（前期）

ジェンダー社会経済学演習（後期）

開発ジェンダー論特論（前期）

国際社会ジェンダー論（後期集中）

国際社会ジェンダー論演習（後期集中 日下部京子・AIT 准教授と共同）

申琪榮

フェミニズム理論の争点（前期）

フェミニズム理論の争点・演習（後期）

開発ジェンダー論特論（前期）

ジェンダー社会科学論（通年）

〈学部〉

足立真理子

文教育学部 グローバル化と経済（1 学期）

文教育学部 グローバル文化学総論（前期）

申琪榮

ジェンダー 8 政治・政策とジェンダー（前期）

### 2) 海外からの研究者および留学生等の長期受け入れ

①アメリカ・コーベル（パリ政治学院博士課程、国際交流基金日本研究フェローシップ）

【担当】足立真理子（IGS 教授）

【期間】平成 27（2015）年 7 月 1 日 - 平成 28（2016）年 4 月 30 日

②尹智昭（日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授）



【担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【期間】 平成 27 (2015) 年 8 月 10 日 - 平成 28 (2016) 年  
8 月 9 日

## 7. 社会貢献

ジェンダー研究所

①諸外国 / 国内の女性関係行政部門、民間団体 (NGO の女性問題担当者等)、研究者等の視察受け入れ、高校生の訪問 (インタビュー取材の受け入れ等)、日本の男女共同参画等の現状について解説など

②<教材提供>通訳者・翻訳者養成校サイマル・アカデミーへ 7 月 30 日に実施した院内集会での講演者音声教材使用に提供した。

足立眞理子 (IGS 教授)

<委員>

・大阪府立大学人間科学研究科女性学研究センター学外  
研究員

・日本学術会議連携会員 (経済学協会)

・経済理論学会幹事

・日本フェミニスト経済学会幹事

<学会・講演等>

・国際フェミニスト経済学会 (7 月 16-18 日、ドイツ・ベルリン)

<その他>

・北京大学中外女性研究センターとの研究交流

・フランス・ストラスブール大学との研究交流 (申琪榮 IGS 准教授と共同担当)

ストラスブール大学外国語・外国文化学部日本学学科サ  
ンドラ・シャル氏 (講師) 訪問 (7 月 20 -23 日)

申琪榮 (IGS 准教授)

<委員>

・日本政治学会分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」

・韓国ソウル大学日本研究所「日本批評」海外編集委員

・韓国ジェンダー政治研究所研究委員

<講演等>

・韓国ジェンダー政治研究所シンポジウム「2016 総選挙

にむけた女性政治 platform 構築」(5 月 15 日、韓国・ソウル女性プラザ)

・ISIS Center for Women and Development Symposium on Violence Against Women(5 月 29-31 日、モロッコ・フェズ)

・「2015 男女共同参画センターえーるフェスティバル」申琪榮講演会「女性の政治参画を考える——『クオータ制』を実現した東アジアと日本を比較する」(6 月 6 日、練馬区男女参画センター)

・European Consortium for Political Research Gender and Politics Conference (6 月 11-13 日、スウェーデン・ウプサラ)

・2015 World Congress for Korean Politics and Society 2015 (8 月 25-27 日、韓国・慶州)

・日本政治学会 2015 年度総会・研究大会 (10 月 10-11 日、千葉大学)

・韓国ソウル大学日本研究所シンポジウム「東アジアの中の在日コリアン——ディアスポラを超えて」(11 月 2 日、ソウル大学)

・福岡県男女共同参画センターあずばる男女共同参画フォーラム「ジェンダー・クオータ——世界の女性議員はなぜ増えたのか」(11 月 29 日)

・台湾国立大学国際シンポジウム Gender Studies in East Asia's Higher Education (12 月 5 日)

・台湾国立大学公開講演 (12 月 4 日)

・九州大学大学院集中講義 (英語) (9 月 24 -29 日)

・福岡市アジア女性センター「カフェで語る」「女性と政治——今、私たちはどこに立っているのか」(9 月 25 日)

・済州平和研究院開院記念シンポジウム 招聘報告「慰安婦問題の今後」(平成 28 年 3 月 24 日)

<その他>

・ソウル大学日本学研究所との研究交流

・学術雑誌『日本批評』14 号特集責任編集長・共同研究プロジェクト『思想と言説』共同研究員

・ソウル大学 SSK (Social Science Korea) 東アジア地域秩序研究会 共同研究員

・フランス・ストラスブール大学との研究交流 (足立眞理子 IGS 教授と共同担当)

- ・韓国ジェンダー政治研究所との研究交流・台湾国立大学女性学女性学研究プログラムとの交流
- ・韓国延世大学 国際大学院 Visiting Scholar

板井広明 (IGS 特任講師)

<委員>

- ・経済学史学会 編集委員
- ・日本イギリス哲学会 選挙管理委員長

<講演等>

- ・立命館大学人間科学研究所アドバンスト研究セミナー Vol.10「ナッジ再考——自由・自律・責任」(12月11日、立命館大学衣笠キャンパス)

<その他>

- ・パリ第2大学、パリ政治学院のグラントによる Nudge Project との共同研究

臺丸谷美幸 (IGS 特任リサーチフェロー)

<委員>

- ・情報文化研究会 (AIC、本部：國學院大學) 運営委員

<講演等>

- ・韓国・光云大学校国際学部 ゲスト講義 (9月22日)

【科目】「日本研究」(担当：大熊智之光云大学校助教授)

【演題】「朝鮮戦争を闘った日系アメリカ人——なぜ彼/彼女らは従軍したのか？」

- ・大阪大学言語学部 ゲスト講義 (11月20日)

【科目】「アメリカ歴史・政経演習 II b」(担当：杉田米行大阪大学教授)

【演題】「1940-1950年代における日系アメリカ人のエスニシティ×ジェンダー×アイデンティティ——日系二世による朝鮮戦争従軍経験」

<その他>

- ・大阪大学言語文化学部 (杉田米行研究室) との交流
- ・韓国・ソウル大学校アメリカ研究所との交流

仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

<委員>

- ・日本医学哲学・倫理学国際誌 編集委員会 委員
- ・桜美林大学 老年学総合研究所 客員研究員

<講演等>

- ・第27回日本生命倫理学会 一般演題II「生殖医療と倫理」学会座長 (11月28日)

- ・聖路加国際大学 単発講義 認定看護師教育課程 (8月3日)

【科目】「看護倫理」

【担当】医療における医療原則と医療倫理へのアプローチ

- ・聖路加国際大学 単発講義 認定看護師教育課程 (不妊症看護) (10月10日)

【科目】生殖医療と社会

【担当】生殖医療と倫理

<その他>

- ・スタンフォード大学、Clayman Institute (ジェンダー研究所) の Fellow Manager、Wendy W. Skidmore 氏とのミーティング実施、情報交換した (9月9日)。

- ・スマイルの会主催、AID で子を持つ親および AID を検討するカップルのためのセミナーにて、海外の状況を報告『ボランティアレジストリーというシステム 海外の状況』(11月23日)

## 8. 文献・資料収集 / 情報提供 / 閲覧活動

### 1) 主要収集資料

文献資料収集・整理、寄贈図書の受け入れをおこなった。

### 2) リファレンスサービス資料及び情報の提供・閲覧・貸出・常設展示

- コピーサービス：常時附属図書館情報サービス・情報システム係で担当
- ホームページ (和文・英文) の更新実施
- 図書以外に関する情報提供

### 3) 図書・資料寄贈 (敬称略)

掲載は、日本語文献：寄贈者名『書名』(著者名)、外国語文献：寄贈者名 書名 (イタリック) (著者名) の順とした。

<日本語文献>

館かおる『舞鶴六十年史 / 舞鶴女子高等學校』(舞鶴女高同窓會編)、ジェンダー研究所『季刊 いま、人間として

第8巻』(季刊 いま、人間として編)、ジェンダー研究所『季刊 いま、人間として第5巻』(季刊 いま、人間として編)、ジェンダー研究所『季刊 いま、人間として第3巻』(季刊 いま、人間として編)、ジェンダー研究所『季刊 いま、人間として第4巻』(季刊 いま、人間として編)、ジェンダー研究所『インパクション 特集 齟齬のかたち — 一検証「従軍慰安婦」問題 107』(インパクト出版会 編)、ジェンダー研究所『インパクション 特集 エイズ・アクティヴィズム 87』(インパクト出版会 編)、ジェンダー研究所『世界から』(アジア太平洋資料センター)、ジェンダー研究所『特集「差別」との向き合い方 86』(インパクト出版会 編)、ジェンダー研究所『近世女大』(土居光華 編)、ジェンダー研究所『女から人間へ — 女性文化研究資料一覧』(花園歌子 編)、ジェンダー研究所『中等教科大正女大』(加藤弘之、中島徳藏合)、ジェンダー研究所『女大』(貝原益軒)、ジェンダー研究所『日本女性史』(伊藤銀月著)、ジェンダー研究所『女教諭養種』(松川半山述)、ジェンダー研究所『高群逸枝の夢』(丹野さきら)、内藤和美『男女共同参画政策——行政評価と施設評価』(内藤和美、山谷清志編著)、早川紀代『歴史をひらく——女性史・ジェンダー史からみる東アジア世界』(早川紀代ほか編)、平野恵子『開発社会学を学ぶための60冊——援助と発展を根本から考えよう』(佐藤寛ほか編著)、江原由美子『ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究——専門的概念の再帰性に着目して』(研究代表者 江原由美子)、ジェンダー研究所『土浦の里——絵と伝聞』(佐賀進、佐賀純一)、ジェンダー研究所『不思議谷の子供たち』(森栗茂一)、ジェンダー研究所『田舎町の肖——Memories of Silk and Straw』(佐賀純一文、佐賀進 絵)

#### 〈外国語文献〉

館かおる『사진으로 보는 경기여고 90년: 1908-1998』(경운회)、ジェンダー研究所 *Xilonen: el periódico de la tribuna del Año Internacional de la Mujer* (World Conference for International Women's Year)、ジェンダー研究所 *Asian Women Speak Out! : A 14-Country Alternative Asian Report on the Impact of the UN Decade for Women* (the Asian Women's Research & Action Network)、

ジェンダー研究所 *Migrant Citizenship from Below: Family, Domestic Work, and Social Activism in Irregular Migration* (Kyoko Shinozaki)、ジェンダー研究所 *Salir adelante: experiencias emocionales por la maternidad a distancia* (Hiroko Asakura)、利根川佳子 *Analysis of the Relationships Between Local Development NGOs and the Communities in Ethiopia: the Case of the Basic Education Sub-sector* (Yoshiko Tonegawa)

#### 【追記】

平成27年10月29日、年報編集委員会は、前年度号の『ジェンダー研究』(18号)に掲載された特集論文、ルオン・トゥ・ヒエン「ベトナムにおけるジェンダー政策——その実績と課題」(pp. 33-52)がNational Foundation for Sciences and Technology Development of Vietnam (NANOSTEI, Research 13.1-2011.15)から助成を受けたものであることを著者の申し出により承認した。

The journal paper, Hien Thu Luong, "Gender Policies in Contemporary Vietnam: Achievements and Challenges" in the Journal of Gender Studies (No. 18, March) was supported by the National Foundation for Sciences and Technology Development of Vietnam, (NANOSTEI), [Research 13.1-2011.15].

# お茶の水女子大学ジェンダー研究所『ジェンダー研究』

## 編集方針

1. 本年報に論文、研究ノート、書評、ジェンダー研究所の事業に関する報告（研究プロジェクト報告等）、彙報の各欄を設ける。
2. 本年報の掲載論文は、投稿論文と依頼論文から成る。
3. 投稿論文は、投稿規程第4条により、査読の上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
  - 3-1 投稿論文1本に対して査読は2名以上で行うこととする。
  - 3-2 査読者は、原則として、編集委員会のメンバー、また必要に応じて学内外の専門分野の研究者から選定する。投稿論文執筆者が本学大学院生である場合にはその指導教官を査読者に加える。
  - 3-3 投稿論文には番号を付し、執筆者名は伏せた状態で査読を行う。
  - 3-4 査読結果は共通の査読評価用紙を用い、定められた基準により評価する。
  - 3-5 掲載決定日を本文末に記す。
4. 依頼論文、ならびにジェンダー研究所の事業に関する報告は、編集委員会で閲読し、必要に応じて専門分野の研究者の助言を求めた上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
5. ジェンダー研究所の事業に関する報告のうち、編集委員会が論文として掲載することが適当であると判断した場合には、投稿論文に準じて査読を行った上、論文として掲載することがある。
6. その他各号の枚数、部数、企画等、年報の編集に関する諸事項は、編集委員会が検討の上、決定する。
7. 『ジェンダー研究』に掲載された内容は全てジェンダー研究所のホームページおよびお茶の水女子大学教育・研究コレクション TeaPot に登録、公開される。
8. 投稿論文や研究ノート等には、英文要約を添付する。200語以内とする。
9. 投稿論文や研究ノート等には、その内容を的確に表すキーワードをつける。5語以内とする。
10. 翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。

## 投稿規程

(2015年7月作成)

- 1 『ジェンダー研究』の内容は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
- 2 投稿者は、原則として、本学教職員・大学院生・研究生・研修生・卒業生、本研究所の研究員、研究協力員、および本研究所長が認める本研究所の活動に関係の深い研究者（研究プロジェクト参加者、研究会報告者など）とする。
- 3 投稿する原稿は未発表の初出原稿とする。
- 4 投稿原稿は完成原稿とし、編集委員会がレフェリーによる審査の上、採否を決定する。
- 5 投稿申し込みをした後で投稿を辞退する場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
- 6 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表その他が多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。
- 7 掲載原稿は、抜き刷りを30部贈呈する。なお、それ以上の部数については、あらかじめ申し出が

あれば執筆者の自己負担によって増刷できる。

- 8 原稿執筆における使用言語は原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
- 9 投稿原稿は原則として、
  - 9-1 日本語の原著論文は注・図表を含めて20000字以内、  
英語の原著論文は注・図表を含めて8000語以内、
  - 9-2 日本語の研究ノートは注・図表を含めて15000字以内、  
英語の研究ノートは注・図表を含めて6500語以内、
  - 9-3 日本語の研究活動報告は注・図表を含めて6000字以内、  
英語の研究活動報告は注・図表を含めて4500語以内、
  - 9-4 日本語の書評は4000字以内、英語の書評は3000語以内とする。
- 10 日本語については当用漢字とし、現代仮名づかいを用いる。なお、引用文等に関して旧漢字、旧仮名づかい等の問題が生じる場合には、前もって申し出ること。
- 11 論文等の提出時には、名前、論文タイトル（副題も含む）の英語表記も表紙に記しておく。ただし、タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。
- 12 図・表・写真および特殊な文字・記号の使用については編集委員会に相談すること。
- 13 原則として原稿はワードプロセッサで入力し、原稿を印刷したもの2部を提出すること。原稿のデータファイル（ワード等の書類ファイルかテキストファイル）をCD-R等の媒体に記録して、それを添付して提出のこと。
- 14 図・表は手書きでもよい。ただし、ワードプロセッサで入力する場合は同一ディスクに別文書として入力する。
- 15 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める〈『ジェンダー研究』執筆要項〉に従う。
- 16 翻訳の投稿に関しては、投稿者が原著者から翻訳許可の手続きを行い、許可取得後に投稿する。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。なお、翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。
- 17 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、ジェンダー研究所の許可を必要とする。
- 18 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。
- 19 投稿論文や研究ノート等の最終原稿<sup>(※)</sup>には、
  - 19-1 英文要約を添付する。200 words 以内とする。なお、英文原稿の場合は、要約を日本語としてもよいが、事前に確認のこと。
  - 19-2 内容を的確に表わすキーワードをつける。5ワードまでとする。

(※) 掲載決定後に修正した原稿を指す

## 編集後記

お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報『ジェンダー研究』第19号をお届けする。今年度は人事の影響もあり、作成開始の時期が例年より遅くなったが、無事刊行することができた。ひとえに執筆者をはじめ、査読を担当頂いた先生方、日本語校正者（加美芳子様）、英語校正者（(株) ジャパンジャーナル Alex Hendy 様）、印刷・製本を担当頂いた（株）よしみ工産様、その他、本誌作成に尽力頂いた方々のおかげであり、ここに厚く御礼申し上げる。

今年度は、巻頭特集として、「グローバル金融危機以降のアジア経済社会とジェンダー——金融領域・生産領域・再生産領域の接合」を掲載した。これは足立眞理子 IGS 教授（本誌編集委員長）が研究代表者であった科学研究費基盤 A 『グローバル金融危機以降におけるアジア新興／成熟経済社会の変動とジェンダー』（平成 23-26 年度）の成果が基となっている。足立氏は序章で、本特集の趣旨を「これまで、フェミニスト経済学の主要な射程に含まれていなかった〈金融領域〉のグローバル化とジェンダーの諸関係を、グローバル金融危機以降のアジア経済社会において、方法的かつ実証的に分析する」と説明する。本誌には 4 編の意欲的かつ、知見に富む論文（足立、金井・申、斎藤、長田）が収録された。続く翻訳（足立）では、ギャリー・デムスキーらの“Race, Gender, Power, and the US Subprime Mortgage and Foreclosure Crisis: A Meso Analysis”の邦訳を掲載した。特集の論文と併せて読んで頂ければ、なお一層、本領域における先端の議論についての理解が深まることを期待している。

そして、今年度は厳正な査読を経て、4 本の投稿論文、1 本の研究ノートが採用された。専門領域、扱う対象は多岐に渡り、バングラデシュを対象とした「BOP ビジネスと農村女性のエンパワメント」（藤掛）、「学歴ミスマッチの持続性に関する男女別実証分析の日蘭比較」（市川）、「理数系教科選好度の推移のジェンダー差に関する研究」（中西）、「日本における科学技術分野の女性研究者支援政策」（横山ほか）など、どれも玉稿と呼ぶにふさわしい出来栄えとなっている。研究ノート「『性同一性障害』概念の普及に伴うトランスジェンダー解釈の変化」（吉澤）は、日本における当該問題の現状を論じており、今後の発展が期待される。

書評は 2 件の投稿原稿（鈴木、尹）と 4 件の依頼原稿（小ヶ谷、土野、李、鳥山）を収録した。今年も社会学、政治学、歴史学、地域研究など、人文・社会科学の幅広い学問領域におけるジェンダー・フェミニズム理論、動向を紹介できたと思う。執筆者の協力に感謝したい。

今年度から当機関は、前身のジェンダー研究センターから、グローバル女性リーダー育成研究機構ジェンダー研究所として再出発した。そのスタートダッシュを飾るにふさわしい、「骨太な」一冊に仕上がったと考えている。本誌が今後とも、日本のジェンダー研究における知の構築の一助となることを願ってやまない。そのためには、皆様からの幅広いご指導、ご支援、ご協力を引き続き賜りたく願う。

編集事務局 臺丸谷 美幸（IGS 特任リサーチフェロー）

お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報  
『ジェンダー研究』

第 19 号 編集委員会

編集委員長	足立真理子	ジェンダー研究所 教授
	猪崎 弥生	ジェンダー研究所 所長 (2015.4.1. ~ 2015.9.30.)、グローバル女性リーダー育成研究機構長
	石井クンツ 昌子	ジェンダー研究所 所長 (2015.10.1. ~)、基幹研究院人間科学系 教授
	申 琪榮	ジェンダー研究所 准教授
	天野 知香	基幹研究院文化科学系 教授
	荒木美奈子	基幹研究院人間科学系 准教授
	水野 勲	基幹研究院人間科学系 教授
	森 義仁	基幹研究院自然科学系 教授
編集事務局	臺丸谷美幸	ジェンダー研究所 特任リサーチフェロー

---

平成 28 年 3 月 29 日 発行

編集・発行 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

〒 112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
TEL 03-5978-5846  
FAX 03-5978-5845  
Email [igsoffice@cc.ocha.ac.jp](mailto:igsoffice@cc.ocha.ac.jp)  
URL <http://www.igs.ocha.ac.jp/>

印刷・製本 よしみ工業株式会社 東京事務所

TEL (03) 5802-5601 (代)  
FAX (03) 5802-5603

---